となりの浜野さん

となりの波野さん

ここのところお隣の波野さんご夫婦が何かと騒がしい。フェンス越しの庭から声高に聞こえてくる。
６月１２日　晴れ
「また野良猫がおれの畑で糞をしてる。せっかく育ってるインゲンもアスパラもどうしてくれるんだ」
「どうしてくれるったって私がウンチしたわけではないでしょうが。野菜大切に育ててるのは分かりますけど、たかが二畝の狭い家庭菜園じゃありませんか。少し大目に見てやって下さいよ」
「大体となりの婆さんが、こっそり餌をやってるのが悪いんだ。俺の畑は通り道とトイレだ。まったく！孫たちに無農薬の野菜を送ってやらねばならんのに」
６月１５日　曇り後雨
「ミャーミャーとうるさい！子猫が産まれたか」
「物置の裏に五匹いますよ。豆粒みたいなかわいい子たち、黒やグレーや三毛や茶もいますよ」
「色なんかどうでもいい。このまま居ついたらどうするんだ。どこかへ捨ててこい。おーほら見ろ、今年はトマトのできがよさそうだぞ。」
６月１６日　曇り後晴れ
「うわっ、なんだ！これは」
「だって夜かなり雨が降ったじゃありませんか。あんまりなのでテラスの方へ移してやったんですよ」
「ばか！雨で困ったら母猫がどこかへやるだろうが。えさなんかぜったいやるんじゃないぞ」
「わかってますよ。ほら、今走って行ったのがお母さんですよ。ガリガリに痩せて。かわいそうに」
「捨ててこいと言ってるのに。まったく！おーうん、キュウリもよく育ってるぞ」
６月１９日　曇り後雨
「悦子！毛布なんか敷いてやってどうするつもりだ。飼う気か！」
「何も飼うつもりはありませんよ。あなたは筋金入りの猫嫌いなんですから。昨日の夜はかなり冷えたから。子猫たち寄り添ってふるえてるんですもの」
「そんなことは母猫に任せておけばいいんだ」
「おっぱいが出ないんじゃないかしら。子猫ってもっとふっくらしてないといけないのに」
「知ったことか。育つものは育つ、育たないものは育たない。野良猫なんぞ増えないにこしたことはない。そんなことより、今日は支柱を立てて肥料をやらねば」

６月２１日　雨
「あなた！子猫がいないの。まさか、捨てたの？」
「母猫がいるんだ。探してなんとかするよ。なにもうちの庭で育てなくってもいいだろう」
「なんて冷たい人！見損ないましたよ。この雨の中、どこへ捨てたんですか」

「公園だよ。いつも野良猫が集まってるじゃないか。6丁目の公園」
「私拾ってきます。私が育てます。あなたと別れて」
とうとう私はとなりのチャイムを鳴らした
「よかったらうちで飼いましょうか。猫が二匹いるけど。なんとか飼えると思うの」